

英語の特殊な構文に関する考察

—Remarks on Some Particular Constructions in English—

澤 田 茂 保

0. はじめに

行動主義心理学者 B.F. Skinner は自らの心理学理論を言語学習に当てはめて、言語学習は習慣形成であると主張した。この考えに真っ向から反対したのは Noam Chomsky であることはよく知られている。チョムスキーにとって、言語学習（彼にとっては言語獲得というべきであるが）は習慣形成などではなく、言語規則の獲得の過程（あるいは生得的な言語能力の発現）でしかなかった。もちろん、彼にとって狭義の言語学習など関心外であるが、言語を人間の持つ知識のひとつと見なして、その知識のあり方を規則の集合として規定しようとしたのである。

この生成文法理論の根幹の考え方は、コンピュータ科学の隆盛とあいまって、人間の知識のあり方を規定する方法として広く受け入れられた。しかしながら、近年の認知言語論はコンピュータ・メタファーによる言語観とはかなり異なった主張をしている。認知言語論のバイブル的な *Foundations of Cognitive Grammar* の第一巻で、Langacker は次のように述べている。

Linguistic structures are more realistically conceived as falling a continuous scale of entrenchment in cognitive organization. Every use of a structure has a positive impact on its degree of entrenchment, whereas extended periods of disuse have a negative impact. With

repeated use, a novel structure becomes progressively entrenched, to the point of becoming a unit; moreover, units are variably entrenched depending on the frequency of their occurrence.

(Langacker 1987; p. 59)

新しい構造は、繰り返し使用される（聞いたり、話したりする）うちに、だんだんと刻み込まれて（entrenched）、最終的にはひとつの単位になる。そして、使うたびに構造は強化されるが、使わなければ弱くなる、という。このような言い回しの中に行動主義的な何かを感じ取らない人はいないであろう。もちろん、Langacker（1987）の巻末の文献には、スキナーなどの行動主義者の著作はひとつも挙げられていないけれども、認知言語論は明らかに「かつていた場所」へと回帰しているようにも思える。

しかしながら、認知言語論と行動主義では大きく異なることがある。それは行動主義のように言語が可視的な具現としての行動パターンではなくて、認知つまり人間の脳の仕組みや働きに関係付けられている点である。かつて脳の仕組みやその働きはブラックボックスであり、顕在化した行動だけが科学的な探求の対象とされたが、脳科学の発展とともに、言語の獲得・習得をいわば「脳の習慣形成」として理解してもよいのではないか、ということだ。したがって、昔への回帰に見えるかもしれないが、新たな装いで現れたというべきであろう。¹

本稿では、このような認知言語論的な観点に依拠して、言語の諸現象がある意味で言語使用（language use）の産物であることを特殊な構文の分析を通して眺めてみたいと思う。第1節では、特殊構文と熟語表現の問題を概観して、第2節以下で“daylights 構文”と呼ぶ特殊構文の事例研究を行う。

1. 特殊構文の考察の意味

生成文法理論では文法を言語使用者の知識としてとらえる。文法は言語を話す人の知識の一部であるが、ではその知識はどのようなものであるか。チョムスキーは、当該言語の可能な文のすべて、かつそれのみを生み出す（生成する）

規則の集合として規定した。可能な文を生み出すというが、その知識は生み出すだけで理解した、というようなことは考えず、統語範疇を並べるルール、端的に言えば「語を正しく並べる知識」であり、文を理解するなどということは考えなかった。したがって統語規則は理論上意味とは関係なく展開して、言語の基本的な構造（句構造）を構成する。そして「語」はレキシコンから文脈依存の規則として最後に入力される。意味を担う最小単位である語が派生の最終段階で構造の末端に導入されるのであるから、言語の構造は意味とは切り離されて、意味は下から上へとまったく構成的に（compositionally）規定される。

このような言語の見方や意味の規定の仕方は極めて明確である。けれども、はたしてわれわれの言語の知識とはこういうものなのか、という疑問は起こって当然である。たしかに「青い空」、「白い砂浜」という表現の背後に統語範疇の連鎖を想定する、つまり形容詞－名詞という連鎖が構成規則として隠れていて、それがこのような表現を生み出している、というのは自然な考え方である。もしそうだとすれば、その規則は人から教わったものでありえない。なぜなら教えられるのは常に個々の具現形であって、抽象的な規則ではないからである。チョムスキーはこの知識を *competence* と呼び、「青い空」や「白い砂浜」といった具体的な使用の知識と区別した。

しかし、はたしてそうだろうか。われわれの頭の中に知識としてあるのは、抽象的な規則群（と語彙の知識）ではなくて、「青い空」や「白い砂浜」のような個々の表現の具現形でしかないのではないか、その背後に規則があると感じられるのは、頭に存在する具現形式から抽象化という能力によって意識されるに過ぎないのではないか。

言葉の仕組みを規則に基づく（rule-based）ものとしてとらえるか、あるいは個々の具体例に基づく（example-based）ものとしてとらえるかという議論は第二言語習得論の Skehan（1998）に見られるし、コーパス言語学の Sinclair（1995）における the open-choice principle/the idiom principle の区別にも見られる対立である。前者がチョムスキーに代表されるとすれば、後者は、現在は生成意味論から再生した Fillmore et al（1988）や Kay and Fillmore（1999）らの特殊構文論、Goldberg（1995）の句構造構文論、また最新では Barlow

(2000) などの usage-based grammar というコンセプトなどに見られる思考傾向で、言語現象に記憶が大きく影響しているという、Bolinger (1975) に溯ることができる普遍的な考え方の一つだと思う。この対立は、どちらかを選ばなければならない、というものではない。言語には本来その両面が存在して、一方の面を強調するあまり、他方を否定しまうと、言語の複雑な実態をとらえられないのである。

言語は規則を適用して“創造的に”生産されるわけでない。むしろ、口から出てくる表現の多くは、過去のいつかの時点で、どこかで聞いたか、あるいは自分がよく言っている表現であったりすることのほうが多いのではないか。だからこそ、Hymes (1971) がいうように、こういう表現はこういう場では使わない、とか、こういう場合はああいうふうに言うのではなく、こういうふうに言うのが自然だ、といった膨大な知識が母国語話者の頭の中には存在するのである。何度も聞く形式はそれだけ固まりやすく、自然に聞こえる。もちろん、オウム返しに発話しているというのではなく、一つ一つの部分は違っているが、全体的な枠組み（これは「句構造規則」という意味ではなく、「表現のテンプレート」のような意味で）は変わらず、その変更可能な部分を修正しているだけ、といった仕組みがあるように思われる。すくなくとも語のレベルを超えた単位が発話の単位となっていることがよくある。この観点から、定型的な表現や熟語的な表現などの分析を通じて、言語に繰り返して起こるパターン (recurrent pattern) の調査・研究には今日的な意味がある。本稿では、このような言語認識から、表現のテンプレートとしてのやや熟語的な傾向のある表現を特殊構文という文脈で論じてみたい。

2. 事例研究

本節では、これまであまり論じられることがなかった特殊な表現形式を取り上げて、その統語的・意味的な制限を事例研究的に考察する。まず、次例の斜体の文に注目してほしい。²

- (1) a. The closet he was always locked in was full of spider webs and

insects, and *it really scared the daylights out of him.*

- b. It was around Halloween 1938 when *Welles' Mercury Theatre* *scared the daylights out of many Americans* by broadcasting a you-are-there news-like story about Martians invading Earth.

(1a) は、蜘蛛や虫でいっぱいの押入れに閉じ込められて、「身の毛もよだつほど怖かった」という意味であり、(1b) はオーソン・ウエルズのラジオドラマで火星人襲来の番組を放送したら、「アメリカ人を恐怖のどん底に陥れた」という意味である。

あとで明らかになるように、(1)の斜体部分の表現形式はかなりの多様性を持っている。以下ではこの表現形式を(1)の典型的な例から“daylights”構文と呼ぶことにする。その統語構造は、原則として(2)の形式を持ったものである。

- (2) NP₁ [_vX] the [_NY] out of NP₂

(2)の構造は、Goldberg (1995) において、使役移動構文 (caused movement construction) と名づけられた構文形のひとつに位置づけられるが、daylights 構文は使役移動構文にさらに条件が加わる。定冠詞 *the* が目的語の名詞に現れ、さらに経路表現が *out of NP* に限定されている。daylights 構文は、動詞 X と名詞 Y に、さまざまな変異形を許しつつも、ほぼ同じ統語的制約のもとに、基本的には同一の意味的な働きをもつ構文群である。

2.1. 節では、Y に名詞 *daylights* が現れる構文を代表例として取り上げて、どのような動詞が現れるかを観察し、動詞 X の変域を明らかにする。2.2. 節では、逆に X を固定して、どのような名詞群が Y に現れるかを考察する。そして、2.3. 節では、daylights 構文の丁寧度の問題を扱い、2.4. 節では、類似の構文について触れる。

2.1. “Daylights” 構文

(1)の文の意味はほぼ次の(3)と同じである。

- (3) a. The closet he was always locked in was full of spider webs and insects, and *it really scared him.*

- b. It was around Halloween 1938 when *Welles' Mercury Theatre* scared many Americans by broadcasting a you-are-there news-like story about Martians invading Earth.

(3)は単純に(1)から the daylights out of の部分を抜き去った文である。つまり、(1)の文は動詞 scare に続く the daylights out of がなくても統語構造上まったく問題がない。³

しかしながら、(1)と(3)には意味の差がある。それは恐怖の度合いである。(1)はただ怖かったというのではなく、構文的な最上級とってよいもので、「最大限に恐怖を感じた」意味だ。したがって、日本語でも「身の毛もよだつほど」とか「恐怖のどん底に」といった表現がないと(1)の訳としてはすわりが悪い。一方、(3)はそのような含意はなく、恐怖の感情を発生させた事実だけである。

程度を除けば(1)が(3)と同じ意味ならば、これは英文としては奇妙な現象である。the daylights は他動詞 scare の直後に現れている名詞であるから、統語上の直接目的語であるにもかかわらず、動詞の意味上の目的語が NP₂ として現れているのである。

また、out of NP₂ は経路表現であり、容器として認識された NP₂ を起点として「その中から外へ」という道筋を表している。したがって、Goldberg (1995) の使役構文の構造から解釈すれば、「人の中から daylights を取り出す」意味になる。このとき daylights に強いて意味を求めるなら、日本語の「気を失う」という表現の「気」に相当するといってもよい。

Goldberg の使役移動構文の典型的な例は(4)のような文である。

- (4) a. He took a ball out of the box.

- b. The ape tried to pull a straw out of the bottle.

これらは経路表現の NP が目的語に現れると全く別の意味になる。しかし、ある種の動詞類は経路表現の NP を直接目的語にとることができる。

- (5) a. He cut a doll out of a piece of paper.

- b. The sculpture carved a Buddha image out of the wood.

- (6) a. He cut a piece of paper.

- b. The sculpture carved the wood.

「紙から人の形を切り抜け」ば、それは「紙を切った」ことに他ならないし、「木から像を彫れ」ば、「木を彫った」ことに違いはない。このように out of の目的語が目的語に現れる。この点で、(5)は daylight 構文と似ているが、(5)は経路表現がなくても英文として可能であるが、daylight 構文では経路表現をとってしまえば、英語としては成り立たない。

(7) a. * ... it really scared the daylight.

b. * ... Welles' Mercury Theatre scared the daylight.

(5)の動詞は創作動詞といわれる動詞群で、経路表現と目的語の交替を示す。使役移動構文では、(6)のような交替を許さない例が多い。例えば、(8)では、(9)のように直接目的語だけを取ることができるが、(10)のように経路表現との交替を許さない。

(8) a. Sam frightened Bob out of the room.

b. Sam lured the mouse out of its hiding place.

(Goldberg 1995; p. 167)

(9) a. Sam frightened Bob.

b. Sam lured the mouse.

(10) a. *Sam frightened the room.

b. *Sam lured its hiding place.

このような点から daylight 構文は使役移動構文の例とは言いながら、特殊な位置にあることが分かる。強いて類似する構造を求めるなら、(11a) のような文であろう。

(11) a. She washed *the soap out of her eyes*.

b. She washed her eyes.

c. *She washed the soap.

(11c) は意味が完全に異なっている。⁴

daylight 構文の the N はどのような統語的な地位を持っているのであろうか。意味的な働きが強意という副詞的なもので、たとえ存在しなくても意味が通じるとはいえ、この名詞は daylight 構文においては統語的な目的語の働きをしている。例えば、英語では副詞は動詞と目的語に出現することはできない。

この *daylights* の後にも同じような統語的な制約がある。

(12) * They scared {yesterday/instantly} the *daylights* out of him.

(12)の非文性は the *daylights* が目的語であることを強く示唆する。

目的語であるかどうかの判断は、受身形になるかどうかであるが、*daylights* は受動態操作によって移動することができる。次の例を参照してほしい。

(13) a. Most people board the ride to get the *daylights* scared out of them,...

b. ... when I was a kid I had the *daylights* scared out of me when I walked into my Norwegian neighbor's house....

この例では、the *daylights* が目的語の位置から移動していることは明らかである。⁵ また、強意の読みも保存されている。このような事実から、*daylights* 構文の目的語は真性の目的語であるといえる。

2.2. どのような動詞がこの構文に現れるか

本節では、どのような動詞が *daylights* 構文に現れるかを考察する。辞書では、さまざまなやり方で *daylights* 構文について意味の記載を行っている。例えば、Macmillan English Dictionary (MED)では、*daylights* を *daylight* と別項目で挙げて、beat/knock the *daylights* out of sb と scare/frighten the *daylights* out of sb として記載し、それぞれ “to hit someone very hard so many times that you injure them seriously” と “to make someone suddenly feel very frightened” という意味を充てている。一方、New Oxford Dictionary of English (NODE)では、*daylight* の語彙項目の中に *daylights* を意義分けして、“used to emphasize the severity and thoroughness of an action” とだけ述べている。MEDの方法では動詞を指定することで、*daylights* がかなり限定的な分布であることが分かるが、これは逆に *daylights* 構文の多様性をとらえていない。一方、NODEは *daylights* の部分が副詞的な意味で、行為の強意であることを示しているように思えるが、*daylights* 構文がどのような動詞とでも使えるというわけではないことが分からない。

MED が示しているように、*daylights* 構文は *scare/frighten* と使われる。しかしながら、*scare/frighten* に固定されているわけではなく、よく似た意味の動詞と共起する。例えば、次のような動詞である。

- (14) a. The scene where a horse on a boat goes mad and actually throws itself into the ocean is done so realistically it *terrified the daylights out of* me.
 b. ... then we went to see “The Sixth Sense”, which *startled the daylights out of* both of us.
 c. Actually, I thought of introverts as slightly inferior and this *threatened the daylights out of* me.
 d. ... my mother yelled at and *intimidated the daylights out of* the 20-something male who had scratched her car.

このような動詞は統語的な特徴では心理動詞 (Psych verbs) と呼ばれるグループで、主語の位置に出来事 (event) に対応する項をとり、目的語の位置には心理的な働きを持つ有情項 (sentient argument) が現われ、心の働きに影響を与えるという共通の意味を持つ。

daylights 構文が心理動詞と親和性が高いのは、心理動詞が、誤解を恐れずに言えば、「心の動き」を表す動詞であるからだ。この心の動きには程度が感じられるので、心理動詞は *very much* などの副詞強意表現と共起する。

- (15) a. It scared him very much.
 b. It so much scared him that he never forgot it.

下線の表現は動詞の表す意味の程度を強める強意表現である。この標準的な強意表現は *the daylights out of* とは共起しない。

- (16) a. *It scared *the daylights out of* him very much.
 b. *It so scared *the daylights out of* him that he never forgot it.

これは、先に述べたように、*daylights* 構文が構文的な最上級であるから、他の程度表現と共起できないからと考えられる。

daylights 構文に表れる心理動詞は恐怖心に関わるものばかりではない。*daylights* 構文は使役移動構文であるので、意味的には「*daylights* を人の中か

ら出してしまおう」意味になる。daylights は、人の「気」のようなもので、通常は人と切っても切れない関係（譲渡不能な所有関係（inalienable possession））があり、その関係を断ち切ることは普通なことではない。ふつう人間とは切っても切れない関係にあるものが身体から分離するという状況は極端な状況である。その状況が結果として生じたことを述べることで程度が最大である解釈が発生する。⁶

daylights は通常は人の中のしかるべきところにあるのだが、外からの心理的な圧力により、心理状態は揺さぶられ、不安定になることで、最悪の場合は「しかるべき場所」から移動してしまうのである。そのため、daylights 構文は心の平静さを失わせる意味を持つすべての動詞で使用できる。「いらだつ」とか「悩ませる」とか、「喜ばせる」とか、喜怒哀楽のすべてに関わるといってよい。

- (17) It's one of the reasons I'm getting out of this profession, and it bothers the daylights out of me.
- (18) It's hard to imagine a gift that will do more for your tyke while simultaneously irritating the daylights out of your liberal neighbors.
- (19) Tell him we don't need his help. Just get rid of him because he is annoying the daylights out of me.
- (20) They are the ones with enough time on their hands to pester the daylights out of Congress for changes on their and our behalf.
- (21) Why does someone like Michael bug the daylights out of me?
- (22) The black sands are home to a host of enormous gulls, who are known for tormenting the daylights out of passing wolves.
- (23) The material is so strong. You could show up at your next gig with no other magic and still entertain the daylights out of them!
- (24) ...in fact, I've buried it in my backyard in a mayonnaise jar where it will confuse the daylights out of future archaeologists.

(25) I went to school with them and was gonna embarrass the *daylights out of* someone when I pull out THAT yearbook.

(26) Not so long ago, I impressed the *daylights out of* a friend, by showing him his face on my PC's screen.

(17)から(22)までの動詞は「悩ませる」事態を表し、(23)は逆に「喜び」に関する。(24)、(25)は「心の動揺」に係わり、(26)は「心への圧力」である。すべて心理動詞に分類される動詞である。これらが the *daylights* 構文で使用され、その意味はほぼ共通した強意の意味を持つことが分かる。

2.3. その他の動詞

前節では *daylights* 構文は心理動詞類と共起する機会が多いことを指摘したが、その他の動詞ではどのような事例があるのであろうか。表1はインターネットの google で、the *daylights out of* を入力して表示された723例に出現したすべての動詞について、それぞれの動詞ごとに各変化形（原形・過去形 (-ed) と過去分詞形 (-en)・-s 形・ing 形）を再度 google で検索して得た数値である。⁷

表1から分かるように、scare に次いで頻度が高いのは beat である。累積比率80%までの語彙11例でみると、心理動詞は4例（scare, bore, annoy, frighten）にもかかわらず、beat などの殴打動詞は6例（beat, bomb, kick, knock, punch, pound）ある。殴打動詞が多いのは、身体的な影響が心理的な影響より強いものとして認識されているためであろう。

殴打動詞は *daylights* 構文では多義的である。強意表現としての読みとしての「人を気絶させるほどに叩きつける」という意味と、結果構文としての読みとしての「人を激しく殴って、気絶させる」意味がある。

(27) Terry Dunn, ... , *beat the daylights out of* Roger in a fight.

(28) So the thug hauled off and *knocked the daylights out of* the preacher. The preacher slowly got back up off the ground and showed the thug the other side of his face.

	原形	en/ed形	-s形	-ing形	合計	比率	累積比率
scare	3590	3880	1330	1330	10130	39.9	39.9
beat	1870	78	1300	811	4059	16	55.9
bore	98	34	1570	178	1880	7.4	63.3
fuck	310	124	47	333	814	3.2	66.5
annoy	95	609	57	41	802	3.2	69.7
frighten	200	154	144	43	541	2.1	71.8
bomb	182	111	44	166	503	2	73.8
kick	213	104	36	150	503	2	75.8
knock	215	89	21	92	417	1.6	77.4
punch	147	62	19	118	346	1.4	78.8
pound	117	46	27	142	332	1.3	80.1
bug	110	17	102	42	271	1.1	81.2
confuse	115	74	28	33	250	1	82.2
shock	51	108	20	19	198	0.8	83
shake	82	35	17	37	171	0.7	83.7
sue	50	6	0	109	165	0.7	84.4
play	55	29	23	41	148	0.6	85
irritate	34	16	82	12	144	0.6	85.6
screw	30	35	31	40	136	0.5	86.1
tax	80	1	7	41	129	0.5	86.6
squeeze	71	5	4	47	127	0.5	87.1
spank	105	6	3	9	123	0.5	87.6
hug	40	50	6	22	118	0.5	88.1
choke	81	9	3	23	116	0.5	88.6
tease	29	73	4	8	114	0.4	89
hammer	29	39	8	35	111	0.4	89.4
please	32	69	2	7	110	0.4	89.8
impress	44	33	22	8	107	0.4	90.2
startle	21	30	40	11	102	0.4	90.6
thrash	37	25	8	22	92	0.4	91
smack	53	11	7	17	88	0.3	91.3
whip	31	26	6	23	86	0.3	91.6
blast	32	27	3	22	84	0.3	91.9
entertain	81	2	0	0	83	0.3	92.2
whack	39	15	6	20	80	0.3	92.5
bash	34	10	3	30	77	0.3	92.8
stomp	43	4	5	25	77	0.3	93.1
belt	36	14	5	21	76	0.3	93.4
bother	6	3	62	3	74	0.3	93.7
enjoy	32	11	3	22	68	0.3	94
shoot	22	25	2	18	67	0.3	94.3
embarrass	34	11	2	17	64	0.3	94.6
blow	38	7	3	15	63	0.2	94.8
pummel	26	1	3	30	60	0.2	95
love	44	10	3	3	60	0.2	95.2
hit	45		4	5	54	0.2	95.4
hack	31	20	0	2	53	0.2	95.6
test	29	10	3	8	50	0.2	95.8
pester	11	13	2	21	47	0.2	96
spook	28	16	1	2	47	0.2	96.2
promote	33	4	1	7	45	0.2	96.4
bang	9	6	9	19	43	0.2	96.6
slap	22	8	5	8	43	0.2	96.8
burn	13	2	25	3	43	0.2	97
smear	1	0	0	40	41	0.2	97.2
sing	18	12	4	7	41	0.2	97.4
work	12	11	1	16	40	0.2	97.6
hump	8	7	1	22	38	0.1	97.7
whale	23	10	0	3	36	0.1	97.8
spoil	28	3	0	5	36	0.1	97.9
spam	32	0	0	4	36	0.1	98
boil	29	2	0	1	32	0.1	98.1
market	26	3	0	1	30	0.1	98.2
compress	15	2	9	2	28	0.1	98.3
praise	19	3	0	4	26	0.1	98.4
optimize	23	3	0	0	26	0.1	98.5
delight	2	0	0	21	23	0.1	98.6
cook	21	0	0	1	22	0.1	98.7
rev	18	1	0	1	20	0.1	98.8
stretch	15	3	0	1	19	0.1	98.9
sell	11	4	0	3	18	0.1	99
chew	1	6	5	4	16	0.1	99.1
exploit	10	1	0	4	15	0.1	99.2
rock	4	3	1	5	13	0.1	99.3
rape	9	2	0	2	13	0.1	99.4
flatter	8	4	0	0	12	0	99.4
leverage	11	0	0	1	12	0	99.4
thrill	5	3	1	2	11	0	99.4
sting	5	2	0	4	11	0	99.4
stuff	1	3	0	6	10	0	99.4
slam	4	2	3	0	9	0	99.4
clobber	5	2	0	2	9	0	99.4
trade	1	4	0	4	9	0	99.4
scan	2	7	0	0	9	0	99.4
pinch	3	1	1	4	9	0	99.4
overcharge	1	0	0	7	8	0	99.4
nag	3	0	0	5	8	0	99.4
take	4	3	0	0	7	0	99.4
survey	2	0	0	4	6	0	99.4
weather	2	2	0	2	6	0	99.4
advertise	4	1	0	1	6	0	99.4
torque	4	1	0	0	5	0	99.4
act	0	1	3	0	4	0	99.4
French-kiss	0	0	3	1	4	0	99.4
wash	1	3	0	0	4	0	99.4
clip	1	1	0	2	4	0	99.4
motivate	2	2	0	0	4	0	99.4
control	3	1	0	0	4	0	99.4
bounce	3	0	0	1	4	0	99.4
write	0	3	0	0	3	0	99.4
bake	2	0	0	1	3	0	99.4
wrinkle	3	0	0	0	3	0	99.4
mulch	3	0	0	0	3	0	99.4
torment	1	0	0	1	2	0	99.4
whop	1	1	0	0	2	0	99.4
fake	0	0	0	2	2	0	99.4
wedge	1	1	0	0	2	0	99.4
spin	1	0	0	1	2	0	99.4
investigate	1	0	0	1	2	0	99.4
force-choke	2	0	0	0	2	0	99.4
rinse	2	0	0	0	2	0	99.4
groom	2	0	0	0	2	0	99.4
wring	2	0	0	0	2	0	99.4
complement	1	0	0	0	1	0	99.4
pollute	0	1	0	0	1	0	99.4
fax	0	0	1	0	1	0	99.4
hunt	0	1	0	0	1	0	99.4
strain	0	0	0	1	1	0	99.4
texture	1	0	0	0	1	0	99.4
sabotage	1	0	0	0	1	0	99.4
dazzle	1	0	0	0	1	0	99.4
save	0	1	0	0	1	0	99.4
合計	9330	6334	5201	4511	25376	100	

表1 daylights と共起する動詞

(27-28) は文字通り「殴った」意味であるが、*daylights* 構文の多くの事例は、次の例のようにむしろ試合などで「相手を敗北させる」意味で使われる。

- (29) Then I played with a friend and it was intense. Even when he beat *the daylight*s out of me it was fun.
- (30) In cricket, Steve Waugh and his team belted *the daylight*s out of England in the First Test.
- (31) So while you definitely want to pummel *the daylight*s out of your enemies, you had better keep a watchful eye on the other combatants.

これらは結果構文の読みはなく、負け方の程度を強める強意表現である。殴打動詞は、英語では容易に「負かす」意味に転化することは興味深い。

このように *daylights* 構文は心理動詞あるいは殴打動詞ともっとも相性がよく、人の心身と譲渡不能な所有関係を有す *daylights* が人と切り離されるという意味を構文的に持つので、心の動きや殴打の度合いを強めるのである。では、他の動詞はどうであろうか。ある動詞が *daylights* 構文の中で使われると、その原義が相性のよい意味にずれてしまう、と考えられる。例えば、表1の13位にある *sue* は「訴える」語義であるが、次の例では、単に「訴える」こととは違い、必要以上に訴えたり、頻繁に訴えたりして、「人を困らせる」という意味に近い。

- (32) As typical of WMI, they sue *the daylight*s out of everyone and drive them into the ground with a promised bribery of “user fee payments” to buy off the opposition.

(32)の *sue* は “annoy by suing” とでもいえる意味である。このように経路表現に人が現れる場合は心理動詞の読みとの結びつきが生まれやすい。

また、表1には *shake/squeeze* などの動詞が見られるが、これは殴打動詞と類似するからである。瞬時的な力の連続か、継続的な力の作用かの違いで、いずれも人に対して身体行為による外力を加えることで共通している。さらに、次例では、「締め上げる」ことで、気を失わせるという意味に加えて、恐怖心を起こさせる、という意味が重なっているように見える。

(33) So just because they're not venomous, that doesn't mean that pythons can't *squeeze the daylight*s out of you.

(33)は scare by squeezing とでもいうべき意味になっており、単にある行為の作用を受けたというより、心理的な作用が生じている。これは daylight's 構文の根幹的含意である。

次例も squeeze とのつながりが感じられるであろう。

(34) She and her family *hugged and kissed the daylight*s out of me when I visited her in Ohio in January.

hug や kiss は心理動詞や殴打動詞と全く関係ないように見えるが、daylight's 構文で使われると、相手に対する行為の激しさや相手に発生した心の動きの激しさが含意される。このように、人が経路表現の目的語に現れる事例では、心理動詞の読みが重なってしまうのである。

同様に、spam は「迷惑メールを送る」意味だが、(35)では annoy の意味が重なっているといえるだろう。

(35) ... the Republican National Committee (RNC) ... claims to be the victim of a dirty trickster who's been *spamming the daylight*s out of innocent civilians

このように原義として心理動詞でも殴打動詞でもない動詞であっても、daylight's 構文で現れると、いずれか一方あるいは両方の意味に引きずられる。例えば、spoil は「あるべき状況や姿が想定されている対象に対して、それが達成されないようにする」といった意味である。したがって、その目的語の心の変化とは直接に関係しない動詞であるので、定義上は心理動詞ではない。

(36) I wanted to pass my best recipes on to my daughter-in-law. I wanted to *spoil the daylight*s out of my grandchildren and great-grandchildren.

しかし、(36)のように、語義の拡張として please に共通する意味展開を示し、そのため派生的に心理動詞になっているといえる。

また、daylight's 構文に現れることで、原義として行為を含んでいなくても、行為の読みを強める例がある。例えば、次例の love は単なる心の思いではな

く、抱いたり、世話をする動作の読みを強める。

- (37) Just like humans, we will always protect the ones we love! Just love *the daylights out of* your pet, the rest will come naturally.

また、次の complement/praise は心理動詞ではないが、「人を喜ばせる」という意味が強まっている。

- (38) The Soup Lady is not shy about this: first you ask for the chef, *complement the daylights out of* him and then ask for his recipe.
(=delight)

- (39) After you have fixed these things, don't forget to praise *the daylights out of* her when she does use it.

以上は NP₂ に有情項が現れた場合であった。

一方、有情項ではないものが現れると比喩的な意味になってしまう。次例は daylights 構文が単に比喩的な強意表現だけではなく、動詞の意味を変化させている例である。

- (40) In a country where States culture is omnipotent and has kicked *the daylights out of* indigenous cultures, serious art is merely a footnote in some foreign scholar's anthropological diary.

ここでは斜体部分を取り去ると意味を成さない。斜体部分全体で「土着文化に破壊的な影響を与える」意味である。「土着文化」に daylights が存在することはないので、これはメタファーとして使用されている。しかし、単なる強意ではなく、「土着文化」に回復不能な変化が発生したことを含意している。このように経路表現が人間でない場合は、daylights は比喩的に使用されている。そして、後戻りできないくらいに変化してしまった、という含意がある。

- (41) She'd put a roast in the oven and just cook *the daylights out of* it until it was a brown tasteless mass all the way through.
- (42) And it works so long as you use boneless, skinless chicken breasts, which aren't so moist and tender if you boil *the daylights out of* them.

- (43) The flows from the landfills would therefore go into the creeks, which they do, which is why they are *polluting the daylight*s out of Lake Lanier.

これらの動詞は継続動詞であるが、daylights 構文で使用されると、目的語の「性質が変ってしまうまで」という含意が現れる。このような意味は多かれ少なかれ daylights 構文には読み取れる。単なる強意でなく、「完全な変化に至るまでの程度」といった読みである。

2.4. どのような名詞が Daylights 構文に現れるか

名詞“daylights”は daylights 構文にのみ現れる特殊な語である。しかし、daylights 構文自体には他の名詞も現れる。本節では、daylights 構文で[_{NP}the N]のNにどのような名詞が現れるかを考察する。定点観測のために、原則として動詞は頻度の高い scare と beat に限定する。⁸

2.4.1. 「意識」

2.2節で、daylights は人とは切っても切れないものだが、叩きつけられれば失われてしまうもの、日本語で言えば「気を失う」の「気」あるいは「意識」のようなものであると指摘した。英語で類似の表現を探せば、life, wits, sanity, sense, consciousness などがある。

2.4.1.1. life

まず、[the N out of] のNの部分に life を入れて検索した。この形での検索を第一検索と呼ぶことにする。google ではすべての出現件数が表示されるが、個々の事例は最高で1,000件ほどしか表示されない。以下では、第一検索で表示されたすべての出現件数を「総出現数」と呼び、事例として実際に表示された数を「出現件数」と呼ぶことにする。

life の第一検索では総出現数は65,300であった。次に、動詞部分に scare/beat (あるいはその変化形) を入れて検索した。動詞を固定しての検索を第二検索と呼ぶ。第二検索では、次のような事例が見られた。

- (44) a. My son jumped out of the closet and shouted *boo!* He nearly

scared the life out of me.

- b. A part of me even wants to see Rasheed Wallace *beat the life out of* a referee, because he did not make a favorable call ...

意味から明らかなようにこれらは強意表現である。実際は、第一検索で現れた事例から見ると、life は文字通りの意味（「命を奪う」）の例が多く、すべてが強意表現の *daylights* 構文ではないと予想される。しかし、6 万件を超える数であることからかなり熟語化しているといえる。

2.4.1.2. wits

wit は複数形でほぼ「正気」の意味を表す。同じく google では総出現数は 7,700 であった。第二検索すると、次のような例が見つかる。

(45) I looked from where the sound came from and I saw a shadow on the wall. I turned my head away quickly because the image *scared the wits out of me.*

(46) The most satisfying part of his win was that he *beat the wits out of* a Julia/Xioayu player named Ricky,

これらは *daylights* 構文であることは明らかである。類似の意味の *reason* は、*daylights* 構文では使用されない。*reason* は人が怖がったりして、出てくるようなものではないという認識があるのであろう。

2.4.1.3. sanity

sanity は「正気」の意味を持つ。第一検索の総出現数は 80 件しかなかったが、第二検索では次のような *daylights* 構文が見られた。

(47) The “Ghost Dance” religion *scared the sanity out of* those people who would control others.

(48) Anyone watch those Michael Jackson videos on Fox? All I have to say that Pappa Joe really *beat the sanity out of* Michael.

この例は強意表現であり、*daylights* 構文である。しかし、(48) の例はかなり強意の表現というよりメタファー的な解釈ができる。同様な例は次のような例である。

- (49) a. Living here has *sapped the sanity out of* me...
 b. The surprise *knocked the sanity out of* me, and I laughed hysterically.

これらは「冷静な気持ちを奪う」という意味で、強意とはすこし異なっている。

2.4.1.4. sense

sense も総出現数は812とわずかであるが、第二検索すると、daylights 構文が確かに存在する。

- (50) Becoming wide awake, she sat up in bed and stared down at the still sleeping form of Joe. That was the second time he *scared the sense out of* her.
 (51) When Tyson recently *beat the sense out of* his white Texan opponent Lou Savarese, ...

また、変異形として、common sense も現れる。

- (52) Also, the media picks one horrific case to *scare the common sense out of* the masses.

また、次のような例もある。

- (53) The blow which the General received seems to *knocked all the sense out of* him.

sense は、all the N や all of the N という形式を許す。それは sense には量を感じられて、「すべて」とか、「いくらか」といった量化が可能だからだ。しかし、all the daylights out of は存在しない。これは daylights が all or nothing の存在として認識されているからであろう。

2.4.1.5. consciousness

以上は、アングロサクソン系の語彙であるが、ギリシア・ラテン系の語彙である consciousness はどうであろうか。総出現数は246であるが、ほとんどは daylights 構文ではなかった。しかしながら、(54)には強意の読みが読み取れるので、daylights 構文である。

- (54) a. ... it's always fun to see famous or pseudo-famous people *beat the consciousness out of* each other.
 b. I just want to go ... and *shake the consciousness out of* him, telling him "Thank you,"

また、consciousness は殴打動詞の例が多く、心理動詞の事例は存在しなかった。consciousness は心理的な働きでは出てこないものなのだろう。意味は分かるが、習慣的なもの (conventional) になっているのではないようだ。

一般に、ギリシア・ラテン系語彙は daylight 構文のように意味と形式が特殊な形で限定される特殊構文と大変相性が悪い。⁹

2.4.2. 「身体部位」

daylights は人の身体の中にあると認識されている存在である。次に、「身体内部にあるもの」という観点から類似するものを探せば、身体部位の語彙がある。

2.4.2.1. heart

総出現数は19,800で、第一検索の出現件数は790件であった。scared で第二検索すると、12件ヒットする。

- (55) a. "Phew! It was only a bird... That *scared the heart out of* me!"
 b. "No. You *scared the heart out of* me, but I'm young, I'll get over it!"

(55)は明らかに強意表現としてしか解釈できない。12例のうち6例が発話の引用文であり、この表現自体がかなり口語的なものであると予測される。

daylights と違い、heart は具体的な臓器を指すことができる。このため、動詞によっては文字通りの意味と強意の意味とが区別できない多義的な場合がある。

- (56) a. The Aztec likened this same act to *tearing the heart out of* a human sacrifice to Huitzilopochtli -- god of fire, war and sun.
 b. Nixon *Tears The heart Out of* Indochina.
 c. Hijackers tore *the heart out of* a way of life.

(56a) は文字通りの意味で「裂いて、取り出した」意味である。(56b) は記事のタイトルからの採取であるが、かなり比喩的な意味で使われていることが分かる。しかし、(56c) になると比喩的な意味というより、強意の意味である。このような多義性を示す動詞は、take (=「とる」) と様態の動詞が合体 (conflate) した動詞類 (rip, cut, tear など) が、物理的な実体として理解される名詞を目的語にとった場合に生じる。例えば、先の例の life にもそのような使用例がある。

2.4.2.2. eyes

同様に、身体内部にある eyes も一例存在した。総出現数として、3,810例あるが、daylights 構文は極めて少ない。事例はファンタジー小説の話をしているインタビューであり、やはり口語的な表現である。

(57) Last time he *scared the eyes out of* every Myrddrall he yelled so much.

例の少なさから、(57)の例は conventional にはなっていないと思われる。しかし、大切なのは(57)から直ちに強意の意味は分かる、ということである。

2.4.2.3. guts

gut は複数形で「はらわた」を意味する。総出現数は6460であり、次例のように、daylights 構文で使用される。

(58) a. “it’s fine... that you’re here... but you *scared the guts out of* Mrs.Wong.”

b. “Is it normal to wake up in the mornings and want to *beat the guts out of* people?”.

guts は抽象的な存在ではなく、実体のあるものとして認識されている。そのため、heart と同様に、文字通りの意味から強意表現の意味 (intensifier) まで段階がある。

(59) You know, my wife is not afraid of many things. She will *rip the guts out of* fish, she will play with frogs, ...

(60) As part of this reorganization, I plan to *rip the guts out of* the Moscow Times, our flagship newspaper.

(61) Joplin's blues voice can *rip the guts out of* you as it explores extremes of sexual longing and pain, but ...

(59)は「はらわたを取る」意味であるが、(60)では比喩的に「大切なところ」という語義に変化して、メタファー的な使用例である。しかし、(61)では、強意表現としての解釈しかない。

2.4.2.4. stuffing

次に身体部位ではないが、文字通り「からだの中にあるもの」という意味であれば、*stuffing* がある。総出現数は20,500あり、かなり多い。第二検索では次のような強意表現の使用例があった。

(62) a. This dream was more of a nightmare, and it *scared the stuffing out of* me.

b. you're undoubtedly hoping the Falcons *beat the stuffing out of* the 49ers....

これも *daylights* 構文である。

2.4.2.5. ass

次に、若干品のない表現になるが、*ass* にも *daylights* 構文がある。

(63) a. The driver stopped about 1 foot away from the paper stand and *scared the ass out of* me.

b. Why the fuck didn't the fucking Wolves *beat the ass out of* the Lakers?

(63b) は「負かす」意味であるが、表現形式からかなり品のない言い方である。

ass と同じような語で *butt* があるが、*daylights* 構文では例が非常に少ない。事例も目立ったものがない。実は *butt* は後述の *off* 型での使用例が多い。

2.4.3. crap/ piss/ shit

これもいささか品がない表現になるが、piss/crap/shit など排泄物を指示する語彙が daylight 構文に多用される。

crap は「質の非常に劣ったもの」を指す語 (epithet) である。「くず」、「ガラクタ」の類から、excrement (糞便) をさす。excrement は身体内部にあるものであるから、daylight 構文で使われる。そして、daylight 構文では最大の分布である。

(64) Every once in a while I would dream of a scary, unseen presence and It *scared the crap out of* me but was conditioned into accepting it as a dream.

(65) Why Airbus will *Beat the Crap out of* Boeing. (表題から)

これらは典型的な daylight 構文である。

同様に、piss (「尿」) も daylight 構文で使用される。

(66) a. She *scared the piss out of* a scrawny 9 year old (that would be me) but I'll give her a pass.

b. The next morning we went up to Connecticut to meet Ann's family, watched the Sox *beat the piss out of* Roger,....

Piss は take と共起する率が高いが、これは take the piss out of で「からかう」という意味で使用されるからである。

次に shit であるが、これは crap と同じように、epithet として使われる。また、分布頻度も高い。

(67) a. AID's itself has *scared the shit out of* the middle class and, probably if they are honest, *scared the shit out of* just about every one else.

b. If I have to, I can get out of this car and *beat the shit out of* this guy.

排泄物は体の中から出てくることは自然なことであるから、それを「たたき出す」ことは強意にはならないはずであるが、結局排泄行為が秘められたものであり、人前でその行為をしたり、他人によって引き起こされることが普通で

はないからである。

2.4.4. tar

また、汚れたものの連想からか、tar も daylights 構文で多用される。

(68) a. I, however, have never watched a movie that has actually scared
the tar out of me.

b. It just wouldn't be Easter without somebody beating *the tar out of the Easter Bunny, ...*

これらも daylights 構文のグループである。

tar は石炭や木材などから精製過程で蒸留されてできる可燃性の液体であるが、色は濃い茶色か黒いので「汚れ」として認識される。そのため、動物が毛づくろいで汚れをとるような場合にも使用される。その意味が (68b) では反映されている。

tar が文字通りの意味を保存しつつ daylights 構文として使用されている例もある。

(69) a. The sun is beginning to *cook the tar out of the pavement* and the women begin to disperse into the high jungle grass.

b. My mother used to fix bacon every morning and she *cooked the tar out of it*, and then squeezed it between paper towels to get the grease out of the bacon.

(69a) は daylights 構文に限りなく近い結果構文である。また、(69b) はベーコンに含まれている脂肪や体の汗を tar に見立てている。しかし、次例は強意の意味しかない。

(70) a. After the initial shock of *burning the tar out of my skin*, the heat seems to relax me and I sit until wrinkles form on my hands, making them look....

b. The doctor was very kind and proceeded to scrub *the tar out of my skin*, then apply iodine....

ダメージを与えるくらいに焼いたり、こすった意味として解釈される。¹⁰

2.4.5. 「地獄」

排泄物は明らかに触れたくない言葉である。同様に、宗教的な影響から、触れたくない言葉として hell がある。これらも daylight 構文に多用される。

hell は出現件数は27万件を越す。daylight 構文も極めて多い。¹¹

(71) a. Demons scared the hell out of me when I was a little kid

b. Also, Brian - the Drummer - can *beat the hell out of* the drums!

(71)はいずれも daylight 構文である。

hell の婉曲語 (euphemism) である heck も同様の daylight 構文で使用され、総出現数は8万件以上ある。

(72) a. ... one of the brochure given by the Park about mountain lion *scared the heck out of* them.

b. Wire-guided missiles *beat the heck out of* Dalghren cannons.

ここまで daylight 構文で目的語に現れる名詞の分布を見た。大きくグループ分けすると、「意識」系、「身体部位」系、「排泄物」系、「地獄」系というこ

N	the N out of での総出現数	第一検索での 出現件数	第一検索での 動詞の種類数
crap	594000	874	50
hell	272000	857	95
shit	120000	972	106
heck	81200	868	140
life	65300	831	?52
piss	47000	875	18
daylights	27200	839	122
stuffing	20500	802	48
heart	19800	790	?34
tar	12800	674	40
wits	7700	681	20
guts	6460	776	73
eyes	3810	697	?34
ass	1800	588	?52
sense	812	812	?69
consciousness	246	246	?15
sanity	80	80	17

表2 名詞の出現件数の一覧

とになる。各語彙についての google の検索結果をまとめると表2 になる。¹²

第一検索で表示された例の動詞を種類で調べて、20例を超える動詞について、上位20語までの出現数を表にしたものが表3である。頻度が高いものは scare/beat と共起する可能性が高い。heart/guts では cut 型の動詞が上位に来て

crap	合計	hell	合計	shit	合計	heck	合計
beat	71860	get	82240	beat	90450	beat	18524
scare	35310	scare	79121	scare	45740	scare	14300
kick	24040	beat	63500	fuck	31020	get	14027
annoy	4635	annoy	24920	kick	25220	confuse	5510
bug	4274	confuse	14710	bomb	4520	annoy	5444
blow	2689	bug	11410	annoy	3794	enjoy	4258
bore	1556	bomb	9409	bug	3761	bug	3391
shoot	1110	enjoy	8038	blow	3127	surprise	3031
smack	1057	surprise	7669	pound	2363	impress	2458
irritate	954	stay	6998	slap	2333	play	2031
punch	787	shock	6368	bore	2035	promote	1571
confuse	755	irriatte	6340	irritate	1977	irritate	1195
sue	720	play	6251	knock	1751	shock	1043
bash	527	impress	5793	smack	1610	bore	954
tear	515	bore	4900	play	1454	frustrate	876
get	487	kick	4879	stomp	1215	bomb	840
frighten	288	promote	4801	shock	1051	drive	820
drive	288	blow	4114	rip	1037	bother	684
hack	268	frustrate	3007	suck	1020	whack	676
nuke	232	pound	2386	bang	861	test	617

stuffing	合計	heart	合計	tar	合計	guts	合計
knock	6319	rip	5115	beat	8459	rip	8459
beat	4957	cut	2930	kick	827	tear	827
kick	2295	tear	2923	scare	507	take	507
pound	436	take	2634	whale	352	cut	352
scare	388	eat	854	whip	328	suck	328
hug	354	pull	192	pound	288	pull	288
rip	266	carve	80	knock	199	pull	199
squeeze	183	burn	73	blast	109	blow	109
tear	161	pluck	68	hit	103	kick	103
tax	115	suck	53	wail	97	knock	97
blow	114	draw	52	slap	88	rev	88
pummel	113	shock	52	smack	70	beat	70
shake	103	shoot	40	stomp	62	strip	62
punch	89	play	26	whoop	61	hate	61
annoy	88	scrape	26	bug	57	hack	57
push	87	gut	25	bomb	48	hate	48
love	72	drag	23	play	43	cannibalize	43
slap	66	blast	21	shake	42	scoop	42
lick	45	squeeze	20	sue	35	stomp	35
bore	42	scare	19	charm	34	squeeze	34

表3 動詞の出現件数一覧

いるため、心理動詞や殴打動詞と使用されている例は少ないことが分かる。これはNと動詞との親和性にも差があるということを示しているといえる。

2.3. Nの多様性について

Nの多様性はほとんど丁寧さ (politeness) の問題である。正確な尺度は主観的なものであるがゆえに難しい。しかし、表4は daylight 構文に現れる語10例について45通りの組み合わせペアを作り、X scare the N out of Yの形式で、丁寧度について直感を調べた結果である。列にある名詞が行にある名詞より丁寧である場合に1を与えて、同じ場合は0.5を与えて表にした。

この結果から見るとが、ほぼ次のような形にまとめられる。

$$(73) \text{ scare the } \left\{ \begin{array}{l} \text{i. daylight/stuffing/heck} \\ \text{ii. tar/guts/crap} \\ \text{iii. hell/ass} \\ \text{iv. shit/piss} \end{array} \right\} \text{ out of NP}$$

daylights や heck (これは hell の婉曲語) は比較的穏当な表現であるが、iii/ivになると憚られるレベルであるといえる。

2.4. 着衣類の構文

最後に、類似の構文として、Nが着衣である事例について考察する。身体と譲渡不可能な所有関係がある「意識」系や「身体部位」系と認識上では連続

	daylights	heck	stuffing	tar	guts	crap	hell	ass	shit	piss	ポイント
daylights		1	0.5	1	1	1	1	1	1	1	8.5
heck			1	1	1	1	1	1	1	1	8
stuffing		0.5		0.5	1	1	1	1	1	1	7
tar				0.5	1	1	1	1	1	1	6.5
guts						1	1	1	1	1	5
crap							1	1	1	1	4
hell								1	1	1	3
ass									0.5	1	1.5
shit										0.5	1
piss											0.5

表4 丁寧度

している着衣類は、例は少ないながら *daylights* 構文として使用される。¹³ 例えば、*the pants* (ズボン) が、*the daylights* と同じく心理動詞類と殴打動詞類とともに、この構文に現れる。

- (74) a. ... and Gore Verbinski is a fantastic director who will *scare the pants out of* anyone who watches this film.
 b. This one has *frightened the pants out of* guests as the best coaster in the park on opening.
- (75) a. Her “worst” books ever could *beat the pants out of* Harry Potter in every single way.
 b. This morning she (=cat) *knocked the pants out of* the chair, then peed on them.

これらの表現も明らかに強意表現である。

しかしながら、*the pants* の構文の場合は、*out of NP* よりも *off NP* の形のほうがずっと数が多い。例えば、*scare* を例にして google で検索すると、*out of* の形式は166件しかないが、*off* の形式は13,520件あった。

この件数の違いは、*out of* 形は限りなく誤用か間違いではないかと思われるほどである。なぜなら、着衣は身体の表面に存在し、「脱ぐ」ことは、表面からの離脱であるので、*off* がふさわしいからである。*out of* は内部から外への読みを持つので、衣服の着脱には不自然である。経路表現が *off NP* であるのは次のような例である。¹⁴

- (76) a. Those aliens *scared the pants off of* me when I was little.
 b. He awoke with a short, shrill scream that *frightened the pants off* an old man who had come in to buy a cable switchbox.

また、着衣の場合は、定冠詞の代わりに、所有代名詞による変異形があり、この場合は *NP₂* は現れない。

- (77) a. I saw the film once and it *scared my pants off*.
 b. When she and I did talk she *bored my pants off*.

(77)の形式はふつうの *daylights* 構文では存在しない。

ズボンはふつう人前では脱いだりしないものだから、それが脱げるのは、た

しかに強意表現になる理由がある。一方で、上着の類はもともと着たり脱いだりする衣服であるから、それが「脱げる」ことで強意表現となる可能性は低い。したがって、the shirts off NP は強意表現にはならない。しかし、google では、hat (帽子) の例があった。

(78) He trapped the mother in the family printing press and *scared the hat off* the father.

しかし、一例だけなので、きわめてまれな例である。

ところが、靴や靴下は daylights 構文で使用される。これは西洋文化では靴を人前で脱ぐことはまれで、靴を脱ぐことはかなりくつろぐ場合に限られることによるのだろうと思われる。日本人のように日常的に裸足になる文化では、この強意表現は意味を成さないであろう。

まず、socks の例である。

(79) a. He sneaked into an empty cupboard and *scared the socks off* Mother Hubbard.

b. I remember an Internet World panel on which I insisted loudly that Amazon was going to *beat the socks off* Barnes & Noble.

いずれも強意表現である。

また、boots も同様に daylights 構文で使用される。¹⁵

(80) a. When I went there were children of all ages but there were some quick scary parts that could *scare the boots off* of anyone.

b. Wilson responded with a cold fury, threatening to “*beat the boots*” off of him.

以上、daylights 構文の変異形として「衣類」系の事例を概観した。着衣類が daylights 構文の変異形として強意の意味で使われることは、譲渡不可能な所有の関係との連続性が認識されているという着衣の理解の仕方の反映であることが分かる。

3. まとめ

本稿は、daylights 構文を取り上げて事例研究的にその特徴を論じた。daylights 構文は、英語の使役移動構文を利用して、副詞的な働きである強意を表している。その方法は、身体性に関わる「ありえないこと」を含意することで程度を高める、という方法であった。この方法自体は英語固有のものではない。例えば、日本語では「値段が『目が飛び出るほど』高かった」とか、「『顎が外れるほど』笑った」などという強意表現がある。これは「ほど」という助詞により程度を表すことが自明であるので、daylights のように構文による強意とはいえないが、同一の解釈的なメカニズムが働いていることは容易に想像されるであろう。

もうひとつ大切な視点は、daylights 構文の生産性である。ふつうは熟語として分類される表現が高い生産性を有するのは、そこに何らかのメカニズムがあるからである。熟語などの定型表現に言語現象の本質が隠れているという議論は最近さまざまな立場の言語学者から指摘されている。¹⁶ この本質的な部分というのは、冒頭に指摘したような、言語における習慣性の問題である。「習慣」という言葉は行動主義を連想させるためにタブーであり、habits という言葉をつかう言語学者はいない。しかし、定型表現が極めて広範囲に出現することや、それが決して単語レベルで固定しておらず、さまざまなバリエーションを許しながら、一定の範囲でつながりを持っているような単位が言語現象の説明の中で今後は優位になってくるのではないかと思う。本稿はそのような意味での語を超えたレベルの単位の事例として daylights 構文を考察した。

References

- Barlow, M. (2000) "Usage, Blends and Grammar," in Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) (2000) *Usage Based Models of Language*, CSLI Publications.
- Bolinger, D. (1976) "Meaning and Memory," *Forum Linguisticum* 1-1, 1-14.
- Chomsky, N. (1959) "Review of B.F. Skinner, 'Verbal Behavior,'" *Language* 35-1, 26-58.
- Fillmore, C.J. and M.C. O'Connor (1988) "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions; the Case of *let alone*," *Language* 64-3, 501-538.
- Goldberg, A.E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument*

- Structure*, University of Chicago Press.
- Hymes, D.H. (1971) *On Communicative Competence*, University of Pennsylvania Press.
- Jackendoff, R. (1997) "Twistin' the Night Away," *Language* 73-3, 534-59.
- Jackendoff, R. (2002) *Foundations of Language*, Oxford University Press.
- 影山太郎 (1989) 「日本語と英語の語彙対照」『講座日本語と日本語教育』第7巻、1-26、明治書院
- Kay, P and C.J. Fillmore (1999) "Grammatical Constructions and linguistic generalizations: The *What's X doing Y?* Construction," *Language* 75-1, 1-33.
- Langacker, R. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites Vol. 1*, Stanford University Press.
- Moon, R. (1998) *Fixed Expressions and Idioms in English*, Clarendon Press: Oxford.
- Numberg, G., Ivan A. Sag and T. Wasow (1994) "Idioms," *Language* 70-3, 491-538.
- 澤田茂保 (1995) 「名詞派生の'-ed'型形容詞について」『中部英文学』第XIV号、141-158
- Sawada, S. (2000) "The Semantics of the Body Part *Off* Construction," *English Linguistics*, 17-2, 361-385.
- Sinclair, J. (1991) *Corpus, Concordance, Collocation*, Oxford University Press.
- Skehan, P. (1998) *A Cognitive Approach to Language Learning*, Oxford University Press.
- Pinker, S. and I. Mehler (1989) *Connections and Symbols*, Cognition Special Issues, Bradford Book, MIT Press.

- 1 この変化はコンピュータ科学自体の発展にも起因している。特に、コネクショニズムに基づく言語モデルは、脳内の習慣形成のモデル化というふうと考えられ、コンピュータ科学自体の発展がその時代の言語観に影響を与えているという事態はかわらない。Pinker (1998) では、生成理論の立場からコネクショニズムにおける「規則」の概念を批判している。
- 2 以下の例は特に断りがない限り、インターネットの検索エンジン google から採集した。
- 3 この名詞には "living daylights" として現れることがあり、google 検索ではむしろ件数が多い。daylights 単独の事例は27,600件であるが、living daylights では36,200件ある。頻度から言えば、living daylights の方が自然だろうが、本稿では daylights が単独で現れる事例で考察する。
- 4 (11a) の目的語は目的語だけが単独で残留できないという点で、真性の目的語とすこし違う。英語には構文上本来的な目的語ではありえない名詞が目的語の位置で認可される構文がある。

(i) The audience laughed the actor off the stage.

一般にこのような目的語を偽の目的語 (fake object) と呼ぶことがあるが、(11a) の the soap もこれに類似する。

また、使役動詞で類似の例を探せば、次のような文であろう。

(ii) He lets his goons smack Beka around trying to sweat the information out of her,...

- (iii) Ranelle had forced the story *out of a reluctant Anthony* and had then become even more determined to talk to the officer.

これらの斜体部分を取り去ると英語としてはおかしい。次例も *daylights* 構文と統語的な振る舞いは同じである。

- (iv) Alwan has recanted and says Israel's shadowy Shin Bet security service *tortured the confession out of him*.

5 be 動詞の受動態の例は google では見出せなかった。一方、後で述べるような他の名詞では、get 受動態では例があった。

- (i) "I *got beaten the pants out of* at the gym...At the end I had to walk away cause I was this close to crying. I wasn't gonna let Tony or any of the others see me cry."

- (ii) At first the surviving GI's say that they *got beaten the hell out of* by 88's (=the make of a tank).

6 Sawada (2000) では、別の構文で、同様のメカニズムについて論じた。

7 google は、日々更新されており、同一の語句を入力しても、日が違うと異なった件数となる。本稿のデータ件数は2003年の10月に調査したものである。

8 Nを変えた場合には、もはや *daylights* 構文と呼べないが、便宜的にこの呼称を使い続ける。

9 ギリシャラテン系の動詞が特殊構文で使用されることが極めて少ないのは、二十目的語構文の制約など英語に共通する事実である。

10 次のような例は、*Daylights* 構文と異なった取り扱いが必要であろう。

- (i) He was a complete severance with as much chance of walking as a plane without wings might fly. But he was walking *the tar out of* those legs with no assistance.

- (ii) At this point I was laughing *the guts out of* my body. The whole sequence is hilarious and I wasn't expecting that final move.

これらは純粋な自動詞（いわゆる *uneragative* 動詞）で the N out of を取り去った他動詞文は文法的に許されない構造である。Sawada (2000) 参照。

11 The hell は副詞的な形式で発生する場合がある。例えば、次の例は the N だけが副詞的な挿入になっている。

- (i) a. Stay the Hell Out of Liberia!

- b. Madden starts down in the hole to help him, but George tells him to back the hell out of his grave.

ここでは the hell は削除できるが、out of までを削除することはできない。そうすると、the hell が単独である種の強意（現実には発話の品位を落とすような形での強意）表現として使われている。これは What the hell are your doing? などと同じ形式の発話の強調である。

12 google の検索によるヒット件数をそのまま語の分布の正確な統計として信用できない。その理由は、google が全世界のサーバーにある text 情報をまったく盲目的に収納してい

るに過ぎないからである。例えば、表1の smear は原形で1件、ing 形で40件がヒットしたが、現実には-ing の例はすべてたった一つの The Miami Herald 紙の転用記事にあるものであった。したがって、現実的には二例しかないので、きわめてまれな例であると推測され、数値だけではこのことは見誤る。表2では分かる範囲で実際の用例数に近い値に修正したが、実際には多くの用例で重複が考えられることをお断りしておく。

13 その他の言語現象でも衣服が身体部位と並行的に認識されていることが指摘されている。澤田(1995)や影山(1988)を参照。

14 off型にはofが加わる例も散見される。So the teacher took the hat off of Daniel's head

15 次例は強意の意味ではない。

(i) Players have to kick their shoes off, and the furthest wins.

(ii) Reaching her quarters, she kicked the boots off her aching feet.

これはkickの動作の結果として、靴などが脱げた、あるいは脱ごうと強く足を振った、という意味で、結果構文の一例である。

16 Wierzbica (1987)、Fillmore *et al* (1988; 2001)、Numberg *et al.* (1994)、Moon (1998)、Barlow (2000)、Jackendoff (1997; 2002)などを参照。